

「子ども病院」起工式

十一月二十日、メッティ
ラで子ども病院の起工式
が行われた。ミャンマー保
健省の関係者や日本の外務
省、JICA（国際協力事
業団）、AMDAのスタッ
フら合わせて約百十人が
出席。プロシエクトの達成
を祈願した。

メッティラ病院隣

ラソの二重構造。院内の壁
は、自然の通風換気をい
けるように配慮している。
起工式では「ミャンマー
子ども病院支援委員会」の
吉岡秀人委員長が「第二次
世界大戦で、多くの日本人
がここで亡くなっています
が、同時にたくさん日本人
がビルマの人々に助けら
れ、ビルマの人たちの親切
に報いた、という気持ち
があります」とあいさつ。
このあと、ミャンマーの
伝統的な儀式にのっとり
て、九つの宝石、黄金に似
せたレンガを建設地に埋め
るセレモニーが行われた。
AMDAは、この病院の

「親切に恩返し」



子ども病院の起工式。ミャンマーの伝統的な儀式にのっとり、黄金などに似せたレンガを建設地に埋めた—11月20日、メッティラ

建設にあわせて、日本国内
に「ミャンマー子ども病院
支援委員会」を組織。岡山
山支店・店番601普通口 84・7730へ。



「明美ちゃん基金」の適用が決まったAMDA
ラムダシア医療連絡協議会」による「ミヤ
ンマー子ども病院」建のプロシエクト。病院が
建られるメッティラ地区を訪ねた。医師のい
ない集落が多く、貧乏から町の病院で治療を受
けるのをためらう人も少なくない。AMDAは
「これら巡回診療や給食活動を行って、だが
「拠点になる病院があれば、もっと幼い命を救う
ことができる」。そして、これは現地の医師や看
護師の養成も。明美ちゃん基金がミャンマー希
望の灯をともし。

ができて、わずか数分
を約時間かかってアレ
ラに到着した。
巡回診療はメッティラ
地区の中の五つの無医村で
行っている。なかでもアレ
イは最も交通事情が悪
く、病院にたつても容易に
病院までたどり着けないと
ころだ。
診療場所の建物の前には
患者たちが長い列を作っ
て待っていた。医療機材はな
く、キンソー医師らAMDA
のスタッフが車から乗を
運び込む。
やけども風邪などもさまざ
まな疾患の患者がいるが、
やはり目立つのは東南アジ
ア特有の病気だ。
マインさん(三三)は一
歳になる長男を抱いて、点
滴を受ける夫のローミン
ルンさん(三三)に心配す
るにつきまっていた。夫の病
名はマラリア。高熱を出し
治療が遅れると意識障害な
どを起して死する。
「AMDAの巡回診療で
も毎月30人以上のマラリ
ア患者の治療をしている。
子供が働きに出て、かかっ
てしまふこともよくあるま
す」とキンソー医師。マラ
リアはミャンマーでの死亡
原因のトップだ。

■生きる
診療所が二十軒ほど離
れた、かや金屋根の建物
に、幼い子供を四十八人が
と待っている。AMDA
が巡回診療とともに始めた
給食センター事業。栄養の
足りない五歳以下の幼児に
食事を与える。毎週三回、
一日あたり二食、原則とし
て「三カ月目の卒業」を目
指している。母親も栄養
の勉強をしている。食料
の購入や料理は、ウニッ
ボンさん(三三)のリーダー
が交代で行っている。
マインさん(三三)は四
人の子持ち。二歳四カ月
になるイウインちゃん(二
歳)四カ月の三女を給食に連
れて来ている。
「食べる前には、い
ないことがあっても、
母親たちが子供を促し
て水の入った洗面器の前
につれていく。「手を洗っ
て」。
「以前は一割くらいの子
供が生まれてすぐに死んで
いた。今はよくなってきて
いるが、気が抜けないと
ウニッボンさん。「この前
も栄養が足りなかったら、
子供が一歳六カ月に死んだ
という」。

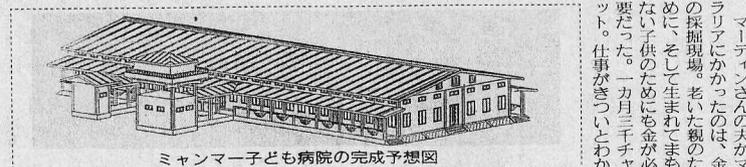
巡回診療や給食

住民との連携を信条に

ミャンマーポ



AMDA巡回診療を行っている建物。病院のある町までは遠く、いつも患者が列をつくって待つという—ミャンマー・イエウエイ村



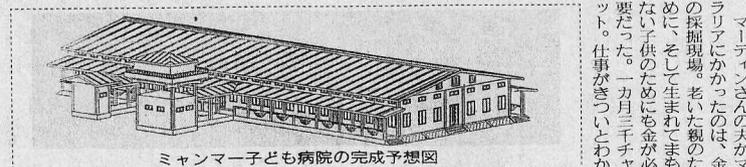
ミャンマー子ども病院の完成予想図

■相互理解
AMDAは住民との連携
を重視している。押しつけ
ではない相互理解に根づく
た援助を信条にしているか
らだ。村長ら住民のリーダ
ーたちの助けをかりてこそ
活動が成り立つ。
ウニッボンさん(三三)はア
レイワ村のリーダーの一人
だ。ニッポンという名は「日
本」の意味。メッティ
ラは第二次世界大戦時の
激戦地で、日本軍がこの村
の近くにキャンプを張って
いたことになんで親がっ
けたという。
AMDAの診療所は患者
からわずかな医療費をあ
げている。金を村人
たちに預けて診療所の維持
に使ってもらうためと
「ただだ」と、変な薬をわた
されたという思い込みか
ら。子供は無料だが、大
人は五チャットと、さらに
初診の際、カルテ代わり
に半紙を手とめたノート
を五チャットで買ってもら
う。村が管理する医療費、
給食後、子供たちがた
ら、米つすらすらとほ
ろと残っていないきれいな皿
が整然と並んでいた。「生
きる」ということへの切実
な思いをかいま見たま
気がした。

小児医療に「拠点」



AMDA巡回診療を行っている建物。病院のある町までは遠く、いつも患者が列をつくって待つという—ミャンマー・イエウエイ村



ミャンマー子ども病院の完成予想図

■相互理解
AMDAは住民との連携
を重視している。押しつけ
ではない相互理解に根づく
た援助を信条にしているか
らだ。村長ら住民のリーダ
ーたちの助けをかりてこそ
活動が成り立つ。
ウニッボンさん(三三)はア
レイワ村のリーダーの一人
だ。ニッポンという名は「日
本」の意味。メッティ
ラは第二次世界大戦時の
激戦地で、日本軍がこの村
の近くにキャンプを張って
いたことになんで親がっ
けたという。
AMDAの診療所は患者
からわずかな医療費をあ
げている。金を村人
たちに預けて診療所の維持
に使ってもらうためと
「ただだ」と、変な薬をわた
されたという思い込みか
ら。子供は無料だが、大
人は五チャットと、さらに
初診の際、カルテ代わり
に半紙を手とめたノート
を五チャットで買ってもら
う。村が管理する医療費、
給食後、子供たちがた
ら、米つすらすらとほ
ろと残っていないきれいな皿
が整然と並んでいた。「生
きる」ということへの切実
な思いをかいま見たま
気がした。



岡山総局 比嘉一隆
社会部 岩田 智雄
写真報道局 前川純一郎

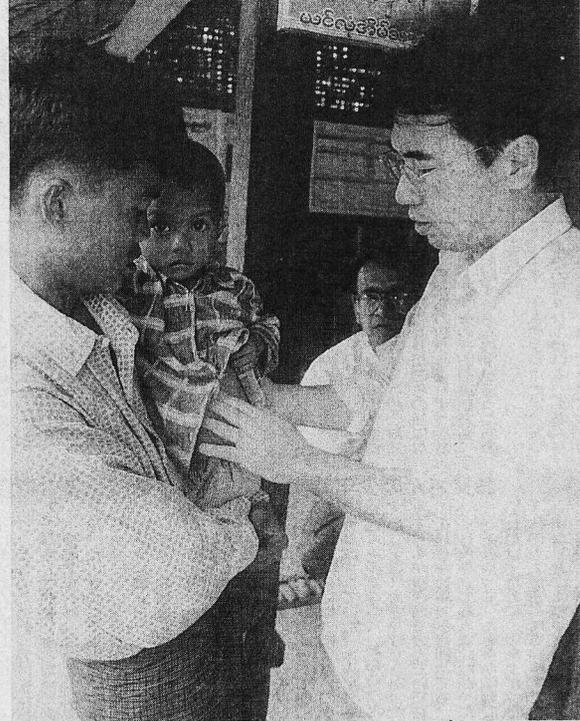
善意が灯す希望

珍しくない無医村

ミャンマー医療事情

吉岡秀人医師に聞く

AMD Aが一九九六年からミャンマー・メッティラ地区で始めた巡回診療活動には、これまで三人の日本人医師が赴任して、初代の医師として現地で約一年間活動、「ミャンマー子ども病院支援委員会」の委員長を務める国立岡山病院の吉岡秀人医師（小児外科）は、ミャンマーの医療事情を次のように語る。



巡回診療を始める前の九はありませんでした。五年十一月に現地にいったNGOとしてはAMD A（オランダ）が、栄養を構えて、コーディネーター（調整員）を置いて日本へ来ていますが、実際には本部との連絡や政府との住民の診療をしている団体 交渉にあたり、ヤンゴンから北に五百八十キロ、離れたメッティラで医療活動を行って来ました。週に五日ほど、車で巡回診療に向かいます。雨期には道がぬかるんで、牛車で行くこともあります。この

対象にし、十五歳以下の子供は無料にしています。メッティラにも国営の病院はありますが、医療費が高い。おわれれば医療費を出せない貧しい人たちが……

子供を診察する吉岡秀人医師（右）。AMD Aは二年前からミャンマーで巡回診療を行っている

医師、看護婦の数は少なく、収入を得るために一部のヤンゴンに集中する傾向もあり、無医村地区は珍しくありません。腎臓透析の機器もない状態なので、日本なら治るような病気で亡くなる子供も大勢見られました。衛生状態も大きな問題です。湖や井戸の水をそのまま飲んで人がほとんどで、細菌に感染の危険性がたえずあります。子ども病院は、母子保健衛生事業の拠点と考えています。（二）に設備を整えれば看護婦や医師が研修でき、医療レベルがあがると見込んでいます。薬を安定的に供給するための住民で土の薬剤組合も作る予定です。また、ミャンマー医師を呼んで、日本の病院で研修を受けてもらうことも検討しています。

活動の輪 世界に

岡山市に本部を置くNGO「AMD A」(アジア医師連絡協議会)が、菅波茂代表(表)は、災害紛争で被害の出た地域での医療活動で知られている。今年で設立十五年目を迎えるAMD Aについて紹介する。

AMD Aが発足したのは一九八四年、事務局は菅波代表が院長を務める岡山市内の病院の一室に置いた。まだ、NGOという言葉になじみがなかった中で、「あそこが病院に何か変なことをしている」「売名行為」「など」と陰口をさやかれたこともあったという。「存在が危なかった」といふ証拠。関心を示して貰えないので「マン・ダ」だったのが「AMD A」になったと菅波代表は苦笑しながら振り返る。

現在、AMD Aは世界二十一个国家に支部を持つ。会員は約千五百人。九五年には国連経済社会理事会登録NGOに、いわゆる国連NGOに承認された。AMD Aが注目を浴びるようになった理由について菅波代表は「国内外のNGOとのネットワークの拡大が功を奏したといえる」と説明する。

菅波代表が他のNGOとの連携を重視するようになったのは「こんなさかじかけがある」。

七九年、菅波代表は医学士三人とともにカンボジアの難民キャンプを訪れた。現地では欧米のNGOや国連機関がすでに入り活動が始まっていた。「できることがあったら、何かさせて欲

しい」。そう申し出ると、思わぬ反応が返ってきた。「何もしてあげようとはない」。美辞も、素性の悪い人々を参加させるわけにはいかなかった。菅波代表は国際社会での「コネクションの大切さを感じた。情報交換や現場の協力者となる者が必要」と翌年から「アジア医学生国際会議」を主催、タイやマレーシアで毎年会を開いてきた。そこに参加した学生たちは、やがて医師になり活動への理解者となった者も少なくなく、その後のAMD Aの礎になつていく。

95年6月のサハリンの地震でもスタッフ派遣して救助活動を行った。

AMD Aは阪神大震災や中米のハリケーン被害など、いち早く現地医療チームを派遣するなど、緊急医療活動のイメージが強い。しかし、「腰をすえた支援も主流になってきています。これまでの人的なつながりや実績をいかして、活動はうまくやれていまして」と田代邦子広報局長は言う。

AMD Aがかかわるネットワークは、APRO(アジア太平洋緊急救援機構)、INNEED(国際NGOネットワーク)、地域防災民間緊急医療ネットワーク、JLEP(日本緊急救援NGOグループ)、アフリカ多国医師団など多様な活動に広がり、それを基盤に活動を展開している。

21カ国に支部、会員1500人

近年、積極的に取り組んでいるのは子ども病院の建設だ。今年十月、ネパールに開設したのに続いて、今回、ミャンマー・メッティラでの子ども病院建設プロジェクトがスタート。他の発展途上国でも着手を検討している。途上国では依然として幼児死亡率が高く、母親の公衆衛生に対する知識不足と貧困がそれに拍車をかけている。こうした現状を打開するのがねらいだ。

ミャンマーでのプロジェクトについて菅波代表は「歴史的にアジアの中でも特に日本に良い感情を持っていて建設を進め、互いの理解を深める場としていきたい」と語った。

■ 寄せられた手紙から

「明美ちゃん基金」は昭和四十一年、先天性の心臓病で苦しみがながら、貧血が原因で手術が受けられなかった児島県の少女、伊瀬知明ちゃんのことを伝える経路新聞の記事がきっかけとなって設立されました。読者から多く義援金が寄せられ、明美ちゃんの手術は成功。その後も明美ちゃんと同じような心臓病を中心とする難病の子供たちの手術費用として使われてきました。

昭和四十七年には外国の子供たちにも適用範囲が広がられ、インドネシアやカンボジア、ペルーなどの百人以上の幼児が救済されました。さらに、医療・衛生基盤が未整備な発展途上国での小児難病の医療活動にも適用することになりました。

◇ 「明美ちゃん基金」のありたい姿
 国の子供たちの医療活動にも適用拡大されることが決まって以降、さかじかけの善意が寄せられています。善の一部の方の手紙を紹介しします。

＊ 伊丹市の女性は「一歳三カ月の男児の母親。ある日、子供の腕にしりのりがあるのを見つけた。大学病院で診てもらったところ「がんの疑いがある。最悪の場合、腕を切断しなければならぬ」と告げられました。

幸い手術は成功しましたが「私の命を引替えてくださったかこの子を守ってくれた」といいます。「子供は親にとってもかけがえのない宝

AMD A 始まりは岡山の病院の1室



阪神大震災で医療救援にあたるAMD Aの医師

「明美ちゃん基金」のありたい姿
 国の子供たちの医療活動にも適用拡大されることが決まって以降、さかじかけの善意が寄せられています。善の一部の方の手紙を紹介しします。

＊ 伊丹市の女性は「一歳三カ月の男児の母親。ある日、子供の腕にしりのりがあるのを見つけた。大学病院で診てもらったところ「がんの疑いがある。最悪の場合、腕を切断しなければならぬ」と告げられました。

幸い手術は成功しましたが「私の命を引替えてくださったかこの子を守ってくれた」といいます。「子供は親にとってもかけがえのない宝

